

丸山忠孝著『カルヴァンの宗教改革教会論：教理史研究』教文館、  
2015年、xi+520頁、ISBN: 978-476273993、定価4,800円＋税

齋藤五十三

(日本同盟基督教団 台湾宣教師)

著者の丸山忠孝氏は東京基督教大学の初代学長であり、日本のキリスト教界を代表する教理史家の一人である。著者は、カルヴァンの後継者であるテオドール・ベーズの研究者としても知られ、主な著作として Tadataka Maruyama, *The Ecclesiology of Theodore Beza: The Reform of the True Church* (Geneva: Droz, 1978) がある。その他、出村彰編『宗教改革著作集 — カルヴァンとその周辺』第10巻(教文館、1993年)の共訳者の一人として知られる。1998年に定年退職後、著者はカルヴァン研究への復帰を果たしたが、本書出版はその研究成果を世に問うためのものである。

丸山氏が研究に復帰したおり、カルヴァン研究の様相の変化に氏は戸惑いを覚えたそうである。だがその後、空白を埋めるべく先行研究を辿ってゆくなか、教会論に関して、いくつかの問題点が明らかになってくる。本書の扱う教会論の研究は、それら問題点が直接の動機となっている。以下、著者が特に念頭に置く二つの問題点を指摘しておく。

第一は、初期ジュネーブ宗教改革、またその神学的基盤である『キリスト教綱要』(以下『綱要』)初版が、教会論との関連で軽視されている点である。この第二の点に関して論考を進めるなかで著者は、特にカルヴァン神学校(2015年5月退官)のR・ムラーを論争相手の一人に選んだ。ムラーによるカルヴァン研究の傾向としては、次のものが挙げられる。まず、カルヴァンを中世から十七世紀正統主義にいたるスコラ学的伝統の中に位置づける思想史的な枠組み、また『綱要』第二版を最重要視する方法論、さらには教会論への関心の希薄さである。これらの点においてムラーは著者と対照的である。ムラーを論考中のターゲットの一人とした点には、カルヴァン神学を、教会を建て上げる学と理解する丸山氏の主張が強く脈打っているといえよう。

第二は、フランス宗教改革とカルヴァンの関係の究明が、今なお困難とされる現状である。丸山氏は本書を通じ、(ジュネーブだけでなく)フランス宗教改革者と

してのカルヴァン提示を試みていく。

本書の方法論については二点を挙げておく。第一には、著者がこれまでの学説や通説に囚われることなく、一次資料に基づくカルヴァンとの直接的な対話を試みていることである。対話の過程では『綱要』各版と聖書注解書を二大資料としつつ、公同的教会論の基礎層が認められる『綱要』の初版を最重要視していく。加えて、初期改革を注視する本書のねらいから、これまで等閑視されてきた初期資料もまた考慮されていく。

第二点は、資料分析に関する方法論である。著者は一次資料の背景にある歴史や文化や学問的な文脈に注目していく。これは教理成立の過程における歴史的な文脈を重視したJ・ペリカンの方法論に学んだもので、これが本書の視野を広角的なものとしている。

以上の方法論に基づく研究と分析の結果を著者は、以下の構成をもって提示していく。

- 第一章 学的形成と公同的教会論
- 第二章 初期ジュネーブ宗教改革と公同的教会論の実践
- 第三章 シュトラスブルク期と新教会論に向けての転換
- 第四章 改革派教会論と宗教改革教会論

第一章では、未解明の点が多いカルヴァンの学問的、そして信仰的な形成期が取り扱われていく。フランス人文主義と法学を背景にしつつ、回心を経て、独学の神学者として『綱要』初版をもって世に問いかけるカルヴァンの姿が明らかになる。また、カルヴァンが「選ばれた者の総数」と定義した、神の民への選びに基づく「公同的教会論」を提示するのもこの章である。この公同的教会論は、後に最終形となる二つの教会論の基礎層を形成していく。

第二章は、初期ジュネーブの改革において、ギヨーム・ファレルの下で独自の改革者そして神学者として頭角を現していくカルヴァンの足跡を辿っていく。これまで軽視される傾向にあったジュネーブ三文書や初期の論争等も論考の俎上に上がる。とりわけカロリ論争を通して「特異」とされるカルヴァンの聖書主義が明らかにされていく。

第三章は、カルヴァンの転機であり、後に発展させていく二つの教会論の揺籃期であったシュトラスブルク滞在を扱う。特にカルヴァンへのマルティン・ブツァー

の影響が解明されていく。

最終章はカルヴァン教会論の二つの最終形を提示する。その第一である改革派教会論は、第二期ジュネーブ改革の中で磨かれたものである。内容としては、神の言葉による教育とその結実を確認していく長老制が挙げられ、その完成が『綱要』第三版に確認されていく。第二の形である宗教改革教会論が提示されるにあたっては、時代を超えた福音主義の教会理念が、カルヴァンの預言者意識と共に解明されていくこととなる。

なお本書はカルヴァン教会論に用いられる思想的な枠組みを幾つか提示しており、それが本書の特色の一つともなっている。以下、五つに言及しておく。

第一は、分断され「苦悩するヨーロッパ」の中での教会論という枠組みである。そこには福音主義に立つ教会（ルター派、ツヴィングリ派）へのカルヴァンによる一致の呼びかけが見られ、焦点となる聖餐論が大きな役割を担っていく。カルヴァンの教会論の公同的な幅の広さ、中庸的かつ調停的なスタンスもこの枠組みの中に位置づけられていく。

第二は、聖書主義並びに公同的教理（公同信条）を用いて形成されている枠組みである。アンティオキア学派とアレクサンドリア学派の両翼を包摂するカルケドン信条におけるキリスト論は、その枠組みの一つといえよう。著者の論考によれば、カルヴァンはこれを聖餐論理解、ひいては教会論の類型にも適用している。

第三の枠組みは、教皇派と再洗礼派の存在である。カルヴァン教会論の枠組みの外にある最右翼ならびに最左翼の両派の存在が、教会論の枠組みの限界を設定していくこととなる。

第四はカルヴァンの歴史的文脈としてのフランス宗教改革である。カルヴァンによる福音主義の弁証と教会論の持つ公同性は、この文脈なくしてはありえないものであった。

第五は、キリスト王国論の下における「教会と国家」の並置である。王国は霊的なもので、歴史の中の教会に絶えずひな型を示す役割を担っていくとされる。

以下、教理史上の貢献として、四つの点から本書を評価していく。第一は、一次資料の読解に裏打ちされた分析の緻密さである。特にフランス宗教改革の文脈を明らかにする論考のプロセスは丁寧である。神の民への選びを基礎とした公同的教会の意味がその文脈から明らかにされ、分断を繋ごうとする中庸的態度と独自でありながらも和協的とされる神学的スタンスも明らかにされているといえよう。

第二は、改革派教会論の丁寧な提示である。長老制を特色とし、教皇派に対峙し

うる形として提示された教会論は、これまでの理解と基本的に同じであろう。しかし、本書の貢献はそこに至るまでの詳細なプロセスを提示したことにある。その典型の一つは教会訓練に関する考察に見られる。すなわち、マタイ福音書18章にある「教会に告げなさい」の文脈において、教会が何を意味するものなのかという分析である。初期教会論では必ずしも明確でなかったものが、改革における為政者との摩擦を経て、不備を整えながら改革派教会論の長老制へと整備されていく。これは牧会者カルヴァンの成熟プロセスと重なり、まことに印象深いものであった。

第三の貢献は、宗教改革教会論の提示である。この教会論はまことに「特異」である。著者の提示するカルヴァンは、義認を中心とする救済史の中に教会を位置づけ、教会自体を目的化せず、むしろ王国建設のための補助的位置にとどまらせていく。これらはいずれも特定の時代に限定されない普遍的内容を持つ。評者には、教会論の枠をすでに超えた預言的な使信そのものとも思われる内容であった。

第四は、カルヴァンにおける「ブツァーの影響」とは何であったのかを、具体的な資料をもって丁寧に提示したことである。しかも両改革者の間にあった緊張や、反面教師としてのブツァーの側面、ブツァーの「神学的勸告」におけるカルヴァン反駁なども読み解きながら、カルヴァンの二段構えの教会論の源流に辿り着く考察は、著者の教理史家としての力量を物語っているものである。

最後に課題として三点を指摘しておく。第一は、カルヴァンの教会論において「神の家族」というモチーフが重視されていない点である。昨今のカルヴァン研究では、カルヴァンが多様な角度から掘り下げられている。なかでも「キリストとの結合」(*unio cum Christo*) という概念の再検討は特筆に値する。「結合」とは信仰者がキリストの神の子性に与るなか、三位一体の交わりにも加えられていくというカルヴァンの多用した救済論中の概念である。この概念の再検討によって、神の家族的な救済論理解 (*the familial aspect in soteriology*) が深まり、その守備範囲の広さが理解されるようになった。さらに、福音を家族的に語るカルヴァン神学の枠組みは、神の父性、神の子どもへの選び、神の家族への受け入れとしての義認、神の子どもの成長としての聖化、神の子の養いとしての聖餐理解といった点からも注目を集めている。実は本書中にもそうした家族的教会論を深める機会はいくつかあったが、残念ながら掘り下げるには至っていない (295頁、399頁)。

第二は、すでに指摘したカルケドン信条の枠組みに関してである。キリストの王国と教会の関係や聖餐論において、「区別されるが分離されない」という概念を説明するうえで、カルヴァンがカルケドンの枠組みを用いたことを著者は指摘す

る(203頁、358頁など)。カルケドンは、アンティオキアとアレクサンドリア両学派のキリスト論の妥結としての枠組みで、これがカルヴァンの教会論の幅の広さをも象徴している。実はこの枠組みが現代の教父学において議論の対象となっている。これまでの通説に対し、有力な教父学者がアレクサンドリア学派の勝利としてのカルケドン理解の新解釈を提案している(例えば、A. Kerrigan, D. Fairbairn, D. Trakatellis, P. Gavrilyuk など)。現時点において議論はまだ結論に至っていないが、定説が覆る可能性も想定される。このような現状を鑑みる時、仮に通説が覆った場合にカルヴァンの教会論が有効性を失ってしまう可能性も否定できない。ゆえにカルケドンの枠組みに加えて、(カルヴァン自身がこだわりを見せた)聖書主義に徹した論考の補強は必要である。今後の研究課題として指摘しておく。

第三は要望である。前項で記したように、本著作はカルヴァン研究における重要な貢献を含んでいるので、著者には本著作の英訳をもって世界のカルヴァン学界に一石を投じてほしいと願う。

カルヴァン神学には難解とのイメージが付きまとう。たとえ大枠は理解できても、内容が重層的で、同じ神学概念にも二段構えの使用があり、そこに実践も統合されていくので単純には読み解けない。しかし著者はカルヴァンとの対話ともいうべき徹底した資料の読み解きを通して思想の枠組みを整理し、また歴史・文化の背景にも注視しながら教会論を明快に提示している。

特に印象深いのは、改革派の枠組みをも超え、さながら荒野の声となって、神の言葉に生かされる教会の形を示した教会人カルヴァンの姿であった。そのように宗教改革教会論を提示した本書の試みは最終的に成功したと言ってよい。この判断は、カルヴァン後の歴史もまた証明している。彼の預言的使信が、まるでバトンのようにフランス、オランダ、英国、スコットランドの教会へと渡され、その後も世界に向けて時代を超えた教会の形を示し続けていったことは周知の通りである。

著者は若き日に博士論文でカルヴァンの後継者ペーズの教会論を扱った。同論文は、「ペーズ教会論は、教理と秩序 (order) におけるまことの教会の改革を、キリストの王国の実現と同一視した」と結論づけている。本書の試みの発端は、そのペーズ教会論の源流を探る改革の形の探求にあったようにもみえる。バトンがどのように受け渡されたのかを確認したい。そんな教会論的ルーツを探る旅が、最終的には全ヨーロッパ、そして後の時代に教会論を語る預言者の提示にまで発展していくこととなった。評者には、そのように思われてならない。